

## 1. 研究計画

母子感染による心身障害児の発生を予防するために、その実態を把握し、予防対策並びに保健指導の指針作りを目的とした。本班では、B型肝炎ウイルス（白木班）、ATL（衛藤班）を除く全ての母子感染に関連する感染症を取り扱った。

## 2. 研究経過：2回の班会議を行なった

第一回班会議：平成6年2月8日 於 茗溪会館

川名分担研究者、研究協力者並びに同伴者（）として、菅村和夫、松永泰子、森島恒雄（山崎俊夫）、藤井仁（渡辺徹、升田春夫）、矢吹朗彦（干場勉）、末原則幸、千葉峻三の諸氏、東大分院より加藤賢朗、小島俊行、小泉佳男の諸氏が参加して行なわれた。

各班員の研究報告とガイドライン作りのための討論が、行なわれた。

第二回班会議：平成6年3月17日 於 東大分院

川名分担研究者、研究協力者並びに同伴者（）として、松永泰子、森島恒雄、藤井仁（升田春夫）、（干場勉）、末原則幸の諸氏、東大分院より加藤賢朗、小島俊行の諸氏が参加して行なわれた。

母子感染に関する各班員の研究成果発表とガイドライン作りの概要と問題点について意見交換が行なわれた。

## 3. 研究結果

1.母体感染症の合併は、約17%あり各感染症毎にそれらの頻度と母子感染の頻度を推定した。

2.年間の本邦における異常児出生数の推定を行なったが不明の点もあり、全国調査の必要を痛感し改めて調査を開始した。小児科2,245施設、産婦人科1,153施設、眼科1,197施設にアンケートを送付した。

3.本邦の年間の母子感染による異常児数を推定し、その予後や治療法を検討し、今後の方向性を示唆した。

4.妊婦の診断法について現時点での問題点を整理した。特に今年度は、「風疹抗体測定法とそれに基づく妊婦検診のあり方」「梅毒」「クラミジア感染」「GBS」についてのワーキンググループを結成し、集中討議を行なった。これを踏まえて、妊婦検査における必要度を提示した。

「妊婦における風疹抗体検査」に関するガイドラインを作成した。

5.妊婦におけるサイトメガロウイルスの抗体陰性者が金沢市では1980年7%であったものが、1992年には22%と増加しつつある。また、1970年代に生まれた者は32%とさらに増加することになる。同様に、東京では、抗体陰性者が従来5%であったものが19%と急増し、25才以下では、35%にも達している。これらの抗体陰性者は、妊娠中の初感染により症候性の先天性サイトメガロ感染症児出生のおそれがあり、早急に対策をたてておく必要がある。

一方、サイトメガロウイルスが母体により感染することが明らかとなった。特に分娩後1ヵ月以後の母乳の20%に本ウイルスが検出されている。

6.ヒトパルボウイルスB19の妊娠中期の感染により、胎児水腫が発生すること、伝染性紅斑の流行期に特に多発していること、原因不明の非免疫性胎児水腫の10%がヒトパルボウイルスの母子感染によるものと考えられる点が明らかとなった。

7.ヒトパルボウイルスB19抗体測定キット4種類のうち3種類は、使用に耐えることが判明した。



## 検索用テキスト OCR(光学的文字認識)ソフト使用

論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります



### 3. 研究結果

1. 母体感染症の合併は、約 17%あり各感染症毎にそれらの頻度と母子感染の頻度を推定した。

2. 年間の本邦における異常児出生数の推定を行なったが不明の点もあり、全国調査の必要を痛感し改めて調査を開始した。小児科 2,245 施設、産婦人科 1,153 施設、眼科 1,197 施設にアンケートを送付した。

3. 本邦の年間の母子感染による異常児数を推定し、その予後や治療法を検討し、今後の方向性を示唆した。

4. 婦の診断法について現時点での問題点を整理した。特に今年度は、「風疹抗体測定法とそれに基づく妊婦検診のあり方」「梅毒」「クラミジア感染」「GBS」についてのワーキンググループを結成し、集中討議を行なった。これを踏まえて、妊婦検査における必要度を提示した。

「妊婦における風疹抗体検査」に関するガイドラインを作成した。

5. 妊婦におけるサイトメガロウイルスの抗体陰性者が金沢市では 1980 年 7%であったものが、1992 年では 22%と増加しつつある。また、1970 年代に生まれた者は 32%とさらに増加することになる。同様に、東京では、抗体陰性者が従来 5%であったものが 19%と急増し、25 才以下では、35%にも達している。これらの抗体陰性者は、妊娠中の初感染により症候性の先天性サイトメガロ感染症児出生のおそれがあり、早急に対策をたてておく必要がある。

一方、サイトメガロウイルスが母体により感染することが明らかとなった。特に分娩後 1 ヶ月以後の母乳の 20%に本ウイルスが検出されている。

6. ヒトパルボウイルス B19 の妊娠中期の感染により、胎児水腫が発生すること、伝染性紅斑の流行期に特に多発していること、原因不明の非免疫性胎児水腫の 10%がヒトパルボウイルスの母子感染によるものと考えられる点が明らかとなった。

7. ヒトパルボウイルス B19 抗体測定キット 4 種類のうち 3 種類は、使用に耐えうるものが判明した。